Osaka University Knowledge Archive

Title	ごぞんじですか？次世代OPAC
Author(s)	久保山, 健
Citation	専門図書館. 2009, 235, p. 53-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25920
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ごぞんじですか？次世代OPAC

1．はじめに

日本国内でも、「次世代OPAC」や「OPAC 2.0」という言葉、そして導入に向けての検討が広がりつつあります。ここでは、それらについて簡単にご紹介し、最近、私の周辺で起きていることや、私自身が考えていることを述べさせていただきます。

なお、次世代OPACの概要については、工藤絵理子氏・片岡真氏の論文[1)]や、私の拙稿[2)]に、より詳しい記述がございます。詳しくは、それらの文献をご覧下さい。

2．用語の問題

「Web 2.0」に始まり、「Library 2.0」や「OPAC 2.0」、そして「次世代OPAC」と、いろいろな用語や概念が現れています。別の言い方をすると、概念のよく分からない用語が現れていると感じる方も多いかもしれません。

やや個人的な考えも入っているかもしれませんが、用語としては、「次世代OPAC」で話を進めさせていただければと考えています。北米では、“Next Generation OPAC/Catalogue”という用語で広まっていますし、日本国内でも「次世代OPAC」という用語が徐々に広まっていると思われるからです。

あくまで個人的な印象ですが、国立国会図書館のカレントアウェアネス・ポータルでも「次世代OPAC」という言葉を使って、導入事例の紹介記事を書かれているように思われますので、それで“多数派”を占めておけば、関連情報検索する時も便利かと思います（統制語！?）。

但し、「Library 2.0」や「OPAC 2.0」もWebの技術を活用した新しいサービスを指すものでしょうし、無視したりする気もさらさらありません。

一方、「次世代」という表現も大げさな印象はありますし、結局「概念のよく分からない用語」かもしれません（だから、本稿にも意味があるのかもしれませんが…）。

さらには、日本国内で検討（の準備？）段階を経過している間に、周囲の状況も変わってきて、最近「次世代OPAC」と呼んでいるものが、変容していく気配は十分に感じます。

しかし、様々な側面から、より多くの方が議論や検討に参加することによって、用語の問題も、そして進むべき方向も見えてくるのではないでしょうか。

3．伝統的OPAC

「次世代」という言葉と対比させるために、あえて「伝統的OPAC」という言い方をさせていただきます。

伝統的なOPACとは、

・検索語の知識が通常必要
・検索ボックスがシンプルなものもありますが、絞り込みはやや面倒
・検索結果の並び替えができないとしても、許容範囲！?
・それ程グラフィカルではない

といった特徴と言えるのではないでしょうか。

皆さんが普段お使いのOPACによって、印象は異なるかと思いますが、割と“玄人好み”のOPACが多いのではないでしょうか。

4．次世代OPAC

次世代OPACの特徴については、いろいろ書かれていますので、ここでは詳しく書きませんが、インタフェースを工夫して、検索や絞り込み、並び替えなどがしやすくなっていることや、関連語を表示することで、「検索語」とは別の切り口で関連する資料に誘導する機能もあります。

図１　大阪大学附属図書館OPAC
（NEC製LICSU-Web）

「伝統的な」OPACの一例。適当な検索語を入れて、50件以上ヒットしましたが、Googleに慣れた人なら、“絞り込み”をせずに、それらを画面上でブラウズして、求める資料を探すのでしょうか（私もそうしてしまいそうです）。

拙稿[2]には、興味深いと感じている機能として、以下のものをあげさせていただきました。

・シンプルな検索ボックス
・絞り込み機能
・関連語の表示
・適合度によるソート
・コメント、レビュー機能（利用者参加型機能）
・リコメンド機能

例えば、**図２**で示すのは、AquaBrowserと呼ばれる商用ソフトです。画面左側のワードクラウドと呼ばれるものに特徴があります。

５．次世代OPACに対する違和感！？

もしかしたら読者の中には、“次世代OPACって、Googleっぽいし、Amazonみたいだし、なんだか馴染めない…”と感じている方もいらっしゃるかもしれません。

実際のところ、私もそうでした。私の場合は、いわゆる伝統的OPACに慣れていましたので、入力に対する結果表示のロジックが見えにくいところに違和感がありました。

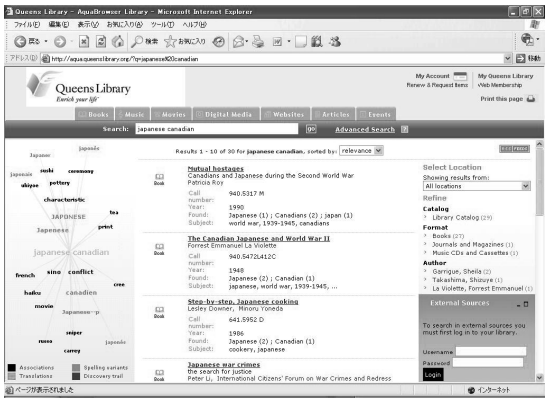

図２　Queen’s Library（AquaBrowser）
画面左側に“ワードクラウド”、右側に“ファセット”、それなりのロジックで適合度順に並べられた一覧、かつ一覧のソート順もボックスから選択すれば変更可能。探したり、絞り込みが随分と簡便だと思われます。

しかし、最近は、学生に限らず一般の方も「検索」という行動には慣れているでしょうし、そこそこ誰でも使えて、使いやすいものの方がいいね、と考え方が変わっていきました。

また、Google、Amazonに限らず、一般のWebサイト（何かの商品販売サイトなども含みます）が見た目もきれいになって、「検索」する場合でも、比較的簡便に操作できるようなサイトが多くなってきています。図書館のOPACも“せめて、あんな感じで、ユーザから見ても違和感のないようなものにしたい”という気持ちもあります。

※但し、投下されている資金の違いを想像すると、簡単に勝負もできないのも事実です。

６．日本の大学図書館の事例

拙稿[2]では触れることができませんでしたが、日本国内でも次世代OPAC、あるいは次世代OPAC的なものの導入事例は現れています。

例えば、東京経済大学図書館や獨協大学図書館が導入した日本事務器株式会社のNeoCILIUSがあげられます（https://opac.tku.ac.jp/top/）。

このOPACは、利用者によるレビュー機能で注目されています。他大学でも運用されている例を拝見すると、レビューは専任教員に限定して運用

している機関が多いように見受けられます。

“レビュー”だけでなく、“シンプルな検索ボックス”、“媒体をアイコンで表示”という点でも次世代OPAC的です。東京経済大学図書館でリリースされているものは、レビューのあるレコードを一覧で表示させています。

私も日本事務器株式会社から概要説明やデモを直接お聞きしましたが、いろいろと検討や試行錯誤をしつつ、機能向上を図っておられる姿勢を高く評価しています。

7．日本の公共図書館の事例

公共図書館界では、個別にいくつかの取り組みがあります。

ごく一例をあげると、日進市立図書館のOPACがあります（http://lib.city.nisshin.lg.jp/）。

このOPACでは、Amazonと連携し、図書の詳細画面で、表紙イメージを表示したり、Amazonへのリンクも設けています。また、「アフィリエイト」という仕組みを導入し、このOPACからAmazonのサイトに遷移し、図書を購入した場合、図書館/自治体に一定のキャッシュバックがあるという仕組みを導入しているようです。

8．次世代OPAC情報交換用メーリングリスト

九州大学附属図書館と大阪大学では、次世代OPACは新しいトピックだということもあり、情報交換・情報共有の枠組みを作ることにしました。現在、「次世代OPAC情報交換用メーリングリスト」を運用しています。経緯等については、拙稿[2]を参照下さい。

なかなか活発なものとして運用できていないのは、歯がゆいところもありますが、関心のある方は、どうぞ以下のURLを参照の上、ご参加いただければ幸いです。

http://dwsv.library.osaka-u.ac.jp/pitt_report/nxopac.html

2009年４月20日現在、グループアドレスを含め、95のメールアドレスが登録されています。

9．図書館システムの改善

私自身が、この数ヶ月の間、考えているのは、日本国内での次世代OPACの展開ということを考えるとき、図書館システムのベンダーさんとの協力がないと、進みにくいのではないかということです。

図書館の業務とサービスはパッケージシステム及びベンダーの導入支援がないと成り立たないという側面もあると思います。

例えば、国立大学の図書館の場合、通常５年のサイクルで図書館システムを入れ換えますが、その度に自館の要望に添ったカスタマイズを、予算の範囲をにらみながら調整（取捨選択？）するのが一般的かと思います。

とすると、あとからカスタマイズするより、最大公約数的に、多くの大学図書館の希望に合致したパッケージシステムができれば、少ない予算でベターなシステムを導入できるのではないでしょうか（かなり単純化した話ですが…）。

次世代OPACというのは新しいトピックですので、意見交換を通じて、システムの機能向上とサービスの向上につながればよいと考えています。

10．結局、求めるべき機能は？

では、次世代OPACというトピックで求めるべきことは何なのでしょうか。正直なところ、私も具体的なイメージが描けているわけではありません。

しかし、京都大学図書館での勉強会でお聞きしたことが示唆に富んでいるので、紹介させていただきます[3][4]。若干、私の翻訳が入っているかもしれない点はご容赦下さい。説明については、私が書き加えたものです。

(1) ワードクラウドなど、次のヒントにつながるものの提示

ワードクラウドは“AquaBrowser”で見られるような、検索語として入力された用語と関連する用語を、グラフィカルに表示させるものです。つまりは、関連用語や、関連資料／文献

を表示させることによって、あるトピックについて、より広く調べることを支援するツールとなります。

(2) 目次や内容紹介文など、コンテンツ関連の情報

例えば、Amazonを使ったことのある人なら、経験も多いと思いますが、目次や内容紹介文があると、ある資料を読むべきか／買うべきかという判断を助けてもらえます。図書館員の立場でも、レファレンスの際に、ある資料がユーザのニーズに応えるものであるか、判断の助けになるのではないでしょうか。

(3) ファセットによる絞り込みや、外部DBへのリンク機能

ファセットは個人的には気に入っているものです。検索結果の一覧画面の、例えば、右側に、出版年や著者、主題や媒体などによって、絞り込みをしやすくするものです。特に漠然としたトピックで、資料を探している時に役立つと思われます。また、Amazonや他の書誌目録的なサイトへのリンクもあれば、資料に対する評価を助け、入手可能性を増やすことができるかと思われます。

ここで指摘されたことも含め、次世代OPACという文脈では、伝統的OPACのようにある入力に対する結果表示だけでなく、ユーザが期待する情報を提示することも期待されていると思います。

また、次世代OPACというキーワードから、OPACだけのことを考えるより、情報サービスの全般や、図書館システムの全般についても、議論が広がればよいと考えています。

11. 深めたい議論

情報交換や情報共有も大事だとは思いつつ、それ自体が目的ではないのは当然かと思います。

岡本真氏は、今年２月の時点で、次世代OPACについて、次のようなことを書かれています[5)]。

「詳細な要件定義や海外事例が目立つが、本質はそこではないと思う」

次世代OPACとは「情報の探索システムとしてユーザー目線で作られたものだ」

痛い指摘です。確かに、個別の機能を云々するだけでなく、ユーザが利用するに当たってどのような機能が必要かを考える必要があるでしょう。

周囲の環境も随時変わっていきますが、図書館関係者の間で、いろいろな形で次世代OPACについても意見を交換し、共有できる考え方ができてくることを期待しています。

大阪大学情報推進部情報基盤課
図書館システム担当
久保山　健（くぼやま　たけし）

参考文献

1）工藤絵理子，片岡真．次世代OPACの可能性－その特徴と導入への課題－．情報管理，2008，vol.51，no.7

2）久保山健．次世代OPACを巡る動向：その機能と日本での展開．情報の科学と技術．2008，vol.58，No.12

3）leva. Liner Note.「利用者中心視点からOPACのあり方を考える」という話をしました．http://note.openvista.jp/2009/opac-study-meeting/［accessed 2009-04-02］

4）図書系職員勉強会（仮称）ホームページ．第109回勉強会の記録．http://kulibrarians.hp.infoseek.co.jp/109th/109th.htm［accessed 2009-04-02］

5）岡本真．ACADEMIC RESOURCE GUIDE（ARG）－ブログ版，［編集日誌］［OPAC］2009-02-27（Fri）：次世代OPACとは何か．http://d.hatena.ne.jp/arg/20090301/1235839256［accessed 2009-04-02］

6）久保山健．次世代OPAC導入事例リンク集．http://dwsv.library.osaka-u.ac.jp/pitt_report/pitt200803ngc.html［accessed 2009-04-02］